

れと異なる所は始めの「大月氏國王治監氏城」から、班固の當時に得られた長安及び都護よりの距離と、戸口の數とを添加し、且つ史記には獨立して記された大夏の記事を大月氏の記事中に收め、これに五翎侯の記事を加へたに過ぎない。大夏の記事を大月氏の記事中に收めて史記の體裁を改めたのは、勿論大夏が大月氏に臣屬したといふ關係から生じたことで、桑原博士の説かれたやうに全く體裁の整理に過ぎない。その體裁整理の結果として、史記に嬌水の南に在つて大夏の都であると記して居る藍市城を月氏の都と記すことになつたに違ない。尤も前漢書にはこれを監氏城と書いてあつて、文字は二字ともに異つて居るのであるが、一般に監は字畫の類似から藍を誤つたもの、市と氏とは同音もしくは甚だ相近い類音と見て、同一地名を寫したものと認められて居るやうである。余もかく認めることに於ては同意するが、併しながら藍と監とは單に字畫の類似の爲に書き誤られたといふよりは、藍*lam にも監*kam の音があつたが爲に、かく兩字を用ゐることになつたのであらうと思ふ。(藍 Anc. lam. 監 Anc. kam. 兩者即ち k:l の alteration につきては Karlgren, Word families in Chinese. p. 56-57 參照。lam は *glam, (*klam) と見るなり)それは監と覽とが或る場合には同義に用ゐられて居るのを考へ、また康熙字典に藍を「又鑑也」と爲し、大戴禮を引いてこれを證して居るに鑒みても推知さるべきことである。市と氏とはこゝに述べたやうに甚だ近似の音であつたことは疑ない。後漢書がこれを藍氏と書いて居るに考へ合すと、その當時行はれた前漢書には藍氏と書かれて居つたのではないかと思はれるけれども、然も北史にはこれに相當する名が贗監氏、魏書には盧監氏と書かれて居ることなどを考へると、何れを正しいとすべきか、俄かに決定し難い問題である。それは何れにしても史記に大夏の都とする藍市城と、前漢書に大月氏の都とする監氏城とは同一地を示したも